

平成 17 年度子ども読書の日講演会

「子どもといっしょに絵本の世界へ」

平成 17 年 4 月 23 日

青山学院女子短期大学・

立教女学院短期大学非常勤講師

中村 粧子

<赤ちゃん絵本>

皆さん、こんにちは。気楽に絵を見ていただいて絵本を皆さんと楽しみたいと思います。そして、子どもたちが日頃読んでいる絵本は子どもを楽しませるだけではなくて、大人の暮らしまで豊かにするということを知っていただけたら、こんなに嬉しいことはありません。

最初に赤ちゃんの本からはじめます。0 歳児から保育園に来る子どもたちが年々増えてきました。それから図書館に本を見に来る子どもや、おはなしを聞きに行く子どもの年齢層が低くなっているのを感じます。2 歳児の読み聞かせをはじめた図書館がたくさんあります。それからブックスタートという事業が数年前から始まっています。現在、全国市町村の約 5 分の 1 がブックスタートに踏み切るほど、赤ちゃんの暮らしに絵本があることがあたりまえになってきていると思います。ただ、私たち保育現場にいた者から申しますと、ブックスタートの目的は本当にすてきなことなのですけれども、本と出会う時期が早ければ早いほうがいと受け取られると、本を受け取る側の子どもたちには無理があります。何かのために早くに与えなくてはという本の楽しみ方ではなくて、自然に子どもたちが本に向かってくるような楽しみ方があるので、保育園や幼稚園の子どもたちの姿を御紹介して、子どもたちがどのように絵本を楽しんでいるのかをお話します。ごく簡単なレジュメを用意しましたので、なるべく小学校低学年くらいまでの子どもたちがどんな本を見ていて、どんなふうに生活や仲間や言葉や想像力を膨らましていくかということを皆さんと楽しんでいけたらいいなと思います。

赤ちゃんは言葉を発することができなくても、言葉をたくさんかけてもらっているの、言葉を聞いたり、ものを見たりすることが大好きです。どれくらいの時期に子どもたちが絵本と出会うかについては、子どもたちの個性等いろいろな要素があるので、何ヶ月とは言えませんが、私たちが見ていておもしろいと思うのは、ほぼ 10 ヶ月前後に 1 つの節目があるような気がします。と申しますのは言葉が出かかることが指先に集まってくるのです。本当に不思議なのですけれども、「あっ、あっ、あっ」と言って、子どもたちが今ここにあるものだけではなくて、少し遠くを指差して、「葉っぱが揺れているよ」、「外にブーブがあるよ」、「おんも行こう」、「あれ見て」と指先に託した思いや、願望、「認めてほしい」といった、いろいろな気持ちをお母さんや身近にいる人たちへ訴えてきています。この頃は、

言葉を蓄えているのです。聞いた言葉を自分のものにしようとして一生懸命だし、「あっ」と言う時期は、ものをしっかり見つめはじめる時期なのです。これは1歳から2歳くらいまで続きます。「あっ、あっ」というのは「良く聞いているよ」、それから「よくものを見ているよ」ということを大人に知らせて、言葉を蓄えている1つの大事な赤ちゃんの時期だと思います。その頃が本も見られるようになる時期かなと思います。それは本でなくても新聞広告の車の絵でも、赤ちゃん向けにつくられた絵本でもいいのですが、ものを目ざとく見て実際にそれが何かとわかる時期が、ものの絵本との出会いのはじまりだと思います。それから2歳位までの間に、赤ちゃんがおはなしの本にどうやって入っていくのかを見ていただこうと思います。ブックスタート事業の意味と子どもたちと本の架け橋がうまくいくと、子どもはおはなしの世界に入っていけるのだらうと思います。

ものとは、赤ちゃんが日常目に見えているものです。食べ物、車、それから身近な動植物、人、外界の自然、建物、空などです。たいていのものは自分にとって親しみのある存在だと思います。ここに果物の本があります。この頃の赤ちゃんの本は独立したものが集まっている本です。例えば動物の本や、車の本や、食べ物の本等いろいろあります。食べ物というくくりはあるけれども、ここはすいかで、こちらはバナナ、こちらはみかん、というふうに食べ物以外のつながりはありません。おはなしになっているわけではないです。例えば動物ですと、ここには猫がいて、こちらには犬、ライオン、サルというふうに動物の集まりですが、1つ1つがバラバラです。乗り物も同じで、トラック、消防自動車というふうで、これが赤ちゃんが最初に出会うものの絵本です。これはものの名前を覚えるためや、知りたい気持ちがたくさんあると考えられて作られているからでしょう。この時期の本を通しての赤ちゃん和大人のつながりは、絵を真ん中にして、大人と子どもがどれだけ言葉を交わしあえるかだと思います。

保育園の子どもたちが実際どんなふうにも本を読んでいるかを紹介します。『くだもの』、この絵本を作った方はとても苦労されたと思います。赤ちゃんにも本を作るのは大変です。わかる言葉も少ないし、見て知っているものも少ないので、ここに、「すいか、さあどうぞ」と書いてあるのです。ここには、「もも、さあどうぞ」と書いてあります。続けてぶどう、りんご、なしと、いろいろな果物が描かれています。大人は絵本を読むときに陥りがちな癖がありますけれども、1ページ目から最後まで律儀に読もうとするのです。こうすると、必ず子どもは目をそむける。どうでもいい顔をする。小さい時期はどれを見たっていいのです。どこのページを見ても、たとえ1ページしか関心を示さなくても、それで十分だと私は思います。特にこれを見ていて感じるのですけれども、ある子どもはバナナのページしか見ない、またある子はすいかだけが好きな子がいます。そうすると私は、その子のことをいい読者だと思います。大人が「おいしそうだね」と言葉をかけてあげたり、赤ちゃんに描かれている果物をつまんで差し出してあげたりします。これはもう1、2年経つと絶対にしないことだと思います。絵本を置いておくと舐めにくる子がいます。本当に食べています。そうすると「おいしいそうだね。一緒に食べようか」と声をかけます。子どもは、

繰り返し繰り返しこういう乗り物や、食べ物、動物を見て楽しんでいる。1つ1つのページは断片に過ぎないけれども、それがやがてページをめくると1つのものが、事柄が変化していく、つながりあうものだのがわかっていくと、子どもたちが物語の形を追うようになってきます。ここに『おにぎり』という本があります。

熱々の御飯を炊いて、御飯にお塩をつけて、そして握って、ギュッ、ギュッ、ギュッと、中に梅干し入れて、またギュッと握って、そうしたらおいしいのできるよ。クルッ、クルッ、クルッと丸めて、できたー。じゃあのり巻こうね。もっとおいしくなるよ。ほら。できあがりー。おにぎりいっぱいできたね。食べてもいいよ。こんなふうにして、赤ちゃんたちと本を楽しんでいます。あきらかに『くだもの』とは違うレベルになっています。1つの事柄が関連しあい、ページをめくると少しずつ変化して行ってできあがる。これがおはなしの入り口、はじまりです。ここまできるともうおはなしの世界に近づいてきます。1歳半くらいです。2歳になるくらいまでの子どもたちは、こうして本をめくると流れがある、完成していくことがわかっていくと、もうおはなしに入ります。こんなときに子どもたちにとってもよくわかるのが、昔話です。昔話は、もともと絵がなくて聞くだけでおはなしがわかるものです。赤ちゃんは生まれてから2歳を過ぎるころまで、子どもたちにとってもよくわかる平たい言葉で述べられている昔話の入り口に向かって、言葉を生んだり、見る力を育てたりしているのではないかと思います。

しかし、この時期の赤ちゃん絵本は玉石混淆で、本当に選ぶのが難しいです。私たちが気をつけて選んでいた本は、食べ物の絵本なら手が出るほどおいしそうな食べ物が描いてある絵本です。みずみずしかったり、おいしそうだったりする絵本は子どもも見ていると思います。車の絵本なら、それは写實的に車を描いてあるだけでなく、質の点から考えると、本当に一緒に遊びたくなるような本です。動物の絵本なら撫でてやりたくなるような動物が描いてある絵本、身近に子どもたちがそのものを楽しめるような絵本がいいと思います。

次に赤ちゃん絵本から少し脱却すると、同じおにぎりでもこんなに違ってきます。この『へんなおにぎり』はナンセンス絵本です。物語とは何かと考えると、物語には起承転結があって、同じおにぎりをテーマにしても意表をつく、意外なものに発展していくなど、「えっ、これが」というような思いで子どもたちを惹きつける。そのわくわくするような世界に子どもたちを連れ出していくのが、物語だと思います。でも、2歳くらいの子どものためには意表をつくとか、逆転するとか、そういうナンセンスな絵本はわかりません。ですから、ものの絵本の時代は、そこにあるものをきちんと踏まえて、りんごをわかっていくとか、動物はこういうふう描かれているとか、そういうふうで断定して、安心してその世界を楽しむことをした方がいいと思います。

2歳を過ぎて、おにぎりの作り方もわかるし、食べたこともあるし、子どもたちはこんな世界を平気で楽しめるようになると、『へんなおにぎり』に大笑いします。

読んでみましょう。一もくもくもくと雲が出てきました。こんな格好をしています。ま

た雲がもくもくもくと出てきました。雲のお出かけです。山のところへやってきました。雲は山をおにぎりにしました。大きな大きなおにぎりです。でも山だから食べられませんもうこの頃から子どもたちは、予測をはじめます。

雲は町へやってきました。ビルのおにぎりを作っています。全部おにぎりになりました。でもビルだから食べられません。ついにお母さんまでおにぎりにされてしまいました。でもお母さんは人間だから食べられません。でも誰かに食べられるかもしれないので僕は心配です

おしまいです。赤ちゃんの時代だったら混乱することでしょう。物事がきちんとわかっていく時期、そのことを認識していく時期には、決してひっくり返しや、意表をつくものは通じない。その後に来るのは言葉のゆとりや、物語をあるものに転じてしまってもついてこられる子どもたちの想像力、遊びの世界の広がりかなと思います。そうやって子どもたちはおはなしの世界に近づいていきます。

<てぶくろ>

1つ絵本を見ていただこうと思います。皆さんの目が子どもたちと比べてどれだけいいでしょうか。ここに『てぶくろ』という本があります。ちょうどここでロシアの児童文学展がはじまりましたけど、ラチョフが描いたウクライナ地方の昔話の絵本です。赤ちゃんの時代からじっとものを見ていて、子どもたちは言葉を育て、絵を見る力を育てています。ですから、ものの違いに敏感で、本当に細やかにものを見ています。私が、子どもに本を読んでいて、「いいなあ」、「不思議だなあ」と思うことは、大人より子どもの方がずっといろいろなことを発見していることです。それはいつも大人たちが絵本を読む時に文字を頼りにして、絵を見ていないことなのかなと思います。暗記をするほどよくわかっているおはなしでも、大人は文字を読んでしまう。子どもは耳から聞こえてくる言葉を手がかりにずっと絵を見ていて、その世界を絵と言葉で理解しようとしているので、目は絵を追っています。おじいさんが雪の野原に手袋を1つ落として行ってしまって、そこにネズミ、カエル、ウサギ、それからキツネ、オオカミ、キバモチイノシシ、クマがやってきて、手袋は満員になります。手袋を落としたことに気づいたおじいさんが戻ります。おじいさんの犬が駆けてくると、みんな逃げて行って、おじいさんは手袋を拾って行くおはなしです。読んでみます。

(『てぶくろ』を読む) 3歳児のクラスの子たちが、このおはなしを大好きで何回も読んでいました。ある時「おしまい」といって本をしまおうとしたら、ある男の子が「お空がだんだん暗くなる本だね」と言いました。何を言っているのかなと思ったのですが、その男の子は何回も読んでいるからか、空に注目していたみたいです。だんだん夕闇が濃くなって行って、茜がさして行って、そしてクマがやってくる頃には、空は真っ暗になっていたという時間の変化に気がついたのです。私は何百回も読んでいるのにいったいどこを見ていたのだろうと思いました。驚きと同時に悔しさも少しあって、何で私の目にはそうや

って見えなかったのだろうと思い、家に帰ってこの本を凝視しました。そうしたら、時間の変化は他にもありました。時間の経過が他にも描かれているのに皆さん気がつきませんか。何か変わっていきませんか。子どもでも気がつかないところに気づいて私はうれしかったです。私が気づいたのは、手袋の上に積もる雪がページごとに違うということです。キツネのページの所から雪が積もってくる。時間の経過はそこにも描かれている。クマが来る頃には、ものすごくたくさん雪が降っていて、いっぱい雪が手袋の上に積もっているのです。時間は空を見てもわかるし、手袋の上の雪を見ても描かれている。そして、もちろん手袋そのものの変化もあります。生活臭がだんだん濃くなり、煙突ができ、そこから煙ができ、窓が作られていたり、玄関のドアにベルがあったりして、子どもたちは1枚1枚ページをめくるごとに、回数を重ねるごとにその発見を増していくのです。

私は子どもたちと本を読んでいて、見方の違いが3点程あると気がつきました。1つは、登場人物への感情移入、自己同一化と言うのでしょうか、物語に容易に入っていくこと。それから同じ絵本を繰り返し読むこと。もう1つは絵を読むことです。もしも子どもが同じ絵本に凝って、繰り返し「これ読んで」と言うようになったら、私はとてもすてきな読み手に育ってくれたと思います。子どもは同じ本を同じように読んでいるわけではないのです。語彙を増やし、言葉の意味合いを理解し、それから見る絵を細かく見るようになり、そのつど違う見方、聞き方をしている。そういう意味で、同じ本を繰り返して読む子どもはすてきな読者だなと思います。

ラチョフは、昔話を絵本にする時にいろいろな思いを込めて絵本にしたのだと思います。たしか1967年くらいだったと思います。私が保育者になって間もない頃、ラチョフが日本に来て講演会を開きました。それで、『てぶくろ』の絵本をどうやってつくったかについて講演されました。そこに集まっている保育者や、いろいろな図書館の方たちがラチョフさんに動物たちが着ている洋服のことを聞きました。いろいろなものを身に付けています。動物絵本は、動物だけを描く場合もありますが、洋服を着ていたり、言葉を話したりするのは子どもたちにとって全く不自然ではないことだと思います。動物が言葉を話しても洋服を着ていてもおかしさを感じないと思います。ラチョフさんは、「よく見てください。日本人たちには理解されないかもしれないけれども、これは、ウクライナ地方のおはなしで、ネズミが着ている服や、ウサギやカエルが着ている服を見るとむこうの人なら、どの民族かがわかるのですよ」とおっしゃったのです。昔話はいろいろな意味合いが込められています。知恵や教訓集などいろいろなものが入っていると思います。「イノシシまで6匹仲良く暮らしていたものを、クマが入ることによって、全部バラバラになってしまう」けれども「本を読む人たちはそんなことを理解したり、わかろうとしたりしないでいいですよ。世の中には一緒に連帯するもの、暮らすもの、と壊すものがあるのだということをおはなしのなかに描きました」とおっしゃいました。昔話は深読みをしまいがちですが、『てぶくろ』はそんなこと全く抜きにしても、動物が集まってくるだけで十分子どもが喜ぶ、楽しいおはなしだと思います。

長いこと保育者生活をしていて、たった1人だけこういう子がいました。4歳児のM君です。入園して、2ヶ月位経った頃、この『てぶくろ』を読んだのです。物語は4歳くらいになると自然にわかるかと思われていますが、そうではないのです。2~3歳までは言葉や遊びの暮らしがとても大きな意味合いを持ちます。『てぶくろ』のおはなしを読んでいたある時、M君が席のところでぶつぶつ言っているのです。何と言っているのかと思ったら、「ウサギはしゃべりませんね」、「オオカミはそんなこと言いませんね」といちいちことわりを言っているのです。ああ、窮屈に育ってきた子だと思いました。そうしたら後ろにいる女の子が、トントンとM君をつつついて、「はなしだよ、はなし」と言ったのです。おはなしがわかるのはどういうことかという、嘘っこを前提としているのを了解していることだと思うのです。もう物語の世界に入るよということ子どもがわかって、物語の世界に入ってくる。それはごっこ遊びに象徴されます。もう少しこの子たちが大きくなると、風呂敷1枚で、お姫様になったり、消防士になったり、それからお父さんに電話をかける真似等、たくさんごっこをします。日常生活を豊かに遊んで生きてきた子どもたちは、なんのステップもなく嘘の世界を楽しめるのだと思います。はじめに御紹介した赤ちゃん絵本は「今」と「ここ」に生きている子どものおはなしです。時は「今」、場所は「ここ」。そして2歳半とか3歳になって物語の絵本を読めるようになる子どもは、いつでもどこへでも行ける子どもたちです。「昔々あるところに」とはじまると、「はい、わかりました」とおはなしの世界に入っていきます。だから「今」と「ここ」にいる時代には、言葉を楽しむこと、絵を遊ぶことをたくさんして、ごっこ遊びをいっぱいすればいいと思います。それが自然とわかったところでいつでもどこへでもの世界に移れるのが、物語の世界に入っていくことだと思います。

<絵本の楽しみ・いろいろ>

レジュメに<絵本の楽しみ・いろいろ>という項目を挙げました。本にはいろいろな種類があつて、子どもたちは全くジャンルを気にしません。図鑑も、工作の本も楽しみ、料理の本も大好きです。物語絵本も読んでもらい、お化けの本も好き、科学的なものも好きなのです。保育現場には圧倒的に女性が多くて、自分の好きなものを軸に本を選ぶので、なかなか子どもたちに届かないようなタイプの本があると思います。特に女の人は虫の本や乗り物の本が苦手で、子どもたちにあまり読まないことがあります。自分が好きなものをベースに、読んでやる領域を広げていくこともなさったらいいと思います。

レジュメの1番下のところに書いたのですが、今の子どもたちのために私たちが大事に残しておきたいと思うことがいくつかあります。年齢が低ければ低いほど、実際に体験することが1番大切だと思います。水の冷たさ、土のぬくもり、手ざわり、虫を飼ってみる、種を蒔いてみる等の体験が大事です。雨の日に散歩してみるとか、物音を聞くとか、はつとなることから子どもたちの目が開いていく、疑問が湧いてくると思います。そして、科学絵本とのすてきな出会いがあると思います。それは知識の量を増やすのではなくて、幼

児のうちで一番大事なことは不思議だとか、「おやっ？」生活の中に好奇心を持つことではないかなと思います。

今、タンポポがあちこちで咲いています。今日うちにあるタンポポを1つ摘んで来ました。なんと一週間前に取ったタンポポをビニール袋に入れておいたら、中で綿毛ができていました。すごい生命力です。根っこはちょん切ってどこの部分を土に入れてもまたタンポポが生えてくるのです。それくらい強いのです。また、私は茎の長さにびっくりしました。これは日本に昔から生えている、シロバナタンポポです。今、シロバナタンポポは花が終わったところです。これくらい伸びると必ず1度地面に寝ます。次に起き上がった時に綿毛になります。そして綿毛を飛ばします。遠くに飛んでいくように背が伸びるのです。ですから、シロバナタンポポも黄色いセイヨウタンポポも、咲いているときよりも、綿毛ができた時の方がずっと背が高いです。タンポポの茎は空洞です。これを剃刀で切って、ちょんちょんと切れ目を入れて水に放つと、水車ができるのです。それから、根っこは乾かしてお茶にするとコーヒーと同じ味がします。本当にコーヒーかと思うくらい似ています。こんなふうにしてタンポポ1つとってもいろいろなことをして遊べます。こうやっていっぱい遊んだ後に追体験する、知識を整理する意味で子どもは科学絵本と出会くと、「あっ、あのタンポポ」と見る目が違ってきます。ですから、何も知らないところで『たんぽぽ』を読んであげるより、子どもたちがずっとピンと来る。そんな気がします。ここに2種類の本がありますが、どっちもすてきです。それぞれに導入の仕方が違う意味で、両方おもしろいと思います。春、お子さんとタンポポを摘んだ後に読んであげるといいと思います。これは春を待ちわびるところから詩的な文章で始まる『たんぽぽ』です。

ー「冷たい風にほんの少し春のおいがする。枯れ草の中でじっと春を待っている草、なにかな？葉っぱの真ん中にまんまるい黄色いつぼみ。タンポポだ」ー

こういう出だしなのです。それでチョウチョがやってきます。それから一応科学的な説明ももちろんありますが、とても文章がきれいです。しかけ絵本になっていて、一部大きくなっていて、毛を飛ばすところが見開きになっています。皆さん見てください。

こっちの『たんぽぽ』はどうなっているか。4, 5歳くらいの子どもにどういうふうに認識させるのがベースになっていく。タンポポで遊んだ子にはこういう入り方もできるかと思います。

「タンポポを知っていますか？どんなところで見ましたか？」

どこに生えているかということです。これがシロバナタンポポです。これは関西から西に生えています。だから、関西から西の岡山とか四国の子はタンポポの絵を描かせると白いタンポポを描きます。今は関東以北にも分布していますが、もともとは西のものです。

例えば、とてもザリガニに興味があるとか、クワガタを幼虫から飼うという時のための本が欲しいという時は図書館を利用されるといいと思います。図鑑は高いので、まずは図書館で見てみる。そして、好きな図鑑を買うようにすると当たり外れがないと思います。

同様にダンゴムシもそうです。いろいろなダンゴムシの本があります。これは今森さんという昆虫とか里山を写される方の本です。本当にダンゴムシ大好きという感じが伝わってきます。つい科学絵本は、理性的に、本質に迫るために順序だてて書くことが主になりがちです。ダンゴムシに惚れこんでいる人が、写真に撮るとこういうダンゴムシの魅力的な本ができるのだと思います。今森さんのお子さんが口をもごもごして、開けさせると中からダンゴムシがいっぱい出てきた。庭にいるダンゴムシを食べてしまったのです。それで、その時に私はカメラマンは素敵だなと思ったのです。驚かないのです。喜んだのです。ああ、虫好きな人はそこが違うのだなと思いました。うちにまだダンゴムシがいたかと喜んで、どこにそれがいるか調べ始めるのです。そして、ダンゴムシを観察してとうとう写真絵本にしてしまうのです。毎日観察していないと絶対わからないダンゴムシの脱皮の瞬間が写っています。前から見るとすごい。戦車みたいです。餌にするのは葉っぱです。こういう枯れ草を食べる。ザリガニもそうですけど、脱皮すると必ず虫は脱いだ皮を食べます。子どもは興奮してこういう本を読んでいます。すごく文字が多いので対象は小学生以上ですが、かいつまんで読んでやれば、身近な虫と遊んでいる子どもの暮らしがもっと豊かになると思います。

実生活の中で子どもは様々なできごとを体験しています。虫や車等、自分の好きなことをもう1度本の中で見てみるのは、物語絵本を見るのとはまた別の体験や種類など、いろいろなことを知ることができるので大事です。良質な本と出会うともっと関心が深まると思います。子どもたちはいろいろな遊びをします。折り紙や、紙飛行機や、お料理等目的に合った本を選ぶこともできます。大人にとっての実用書のようなものが図書館にはたくさん揃っているの、目的によって選べばいいと思います。科学絵本や実用書を生活の中で大事にしてやるのが、子どもの体験を膨らませます。

それから、この頃流行っている言葉遊びの絵本、これもおもしろい本がたくさん出ています。赤ちゃんの頃から言葉遊びは楽しめます。赤ちゃんは音が持つ響きを体で受け止めて、不思議だなと思ったり、おもしろいなと思ったり、キュッとしまるような感じがしたりして、言葉の抑揚やリズムを楽しんでいます。3歳を過ぎたくらいから言葉遊びはいろいろもっとあります。しりとり、早口言葉、逆さ言葉、「あ」のつくもの、なぞなぞ、詩、わらべ歌など、たくさんあります。昔話の中の不思議な言葉や言葉遊びの中の不思議な言葉は子どもの耳を敏感にすると思います。意味はわからなくても「くるみは ぱっぱ、ぱあくづく、おさなぎ、やあつの、おつかあかあ ちゃあるるう、すってんがあ」なんて言うだけで、なんだろうと子どもたちは思います。不思議な言葉の響きを楽しむことが、いろいろな本を読む時に耳の敏感さを育てるのだと思います。

<物語の本>

物語の本に移りたいと思います。なぜ物語の本が子どもたちにとって大事なのかについて、いくつか気づいたことをお話したいと思います。出版されている絵本のジャンルの中

では物語の本が1番多いと思います。なぜかという、1つには事件とか事柄のおもしろさがあるからです。不思議な世界、いろいろなところに行く、とてつもない変化をするなど、日常子どもたちが絶対見聞きできないようなものが本の中には起きています。もう1つはできごとの不思議さだと思います。さらにもう1つは、登場人物の豊かさだと思います。4歳とか5歳とか6歳の子どもたちを見ていると、日常で身近に出会う人は本当に限定されています。家族、幼稚園、保育園、近所の人など、本当に少ない人の中で子どもたちは過ごしています。物語の中にあらわれてくる人々の生き方のユニークさとか、意外な人物たちと出会うことで、子どもは本当にたくさんのもをもらっていると思います。すごく欲深い人、ずっと寝て暮らすようなずぼらで寝ぼすけみたいな人、すごく悪賢い人、うそつきの人など、絵本にはいろいろな人が出てきます。そういう人々に出会うことによって子どもたちは、頭の中にいろいろな人を住まわせると思います。例えば、うちの母さんはこういう人だけれども、このおはなしのお母さんはこうだとか、友達のお母さんはこうだとか考えて、いろいろなことを蓄えていくことが、想像力、思い描く力を生むのではないかと思います。

子どもたちは、本を楽しむだけでなく、人との関わりを楽しんでいるはずで、誰に読んでもらっているかはとても大きいと思います。それから、その本の中の人々と暮らしていくことは大きいと思います。例えば、ここに『おかあさんだいすき』という本があります。男の子のダニーが、お母さんの誕生日にどんな贈り物をしようかと考えてプレゼントを探しに行く。物語の構成の仕方が、子どもたちにとってもよくわかるように巧みで、繰り返されていって、そして、最後に満足のいく起承転の「転」の部分があって、「あっ、なるほど」という結びが物語の世界に連れて行くのだと思います。これを見ていると、子どもが誕生日と「もの」を自然と考えるようになるのです。

(絵本を開いて) これはダニーが、階段のところでお母さんに何を贈ろうかと考えているところです。すると動物たちが次々とやってきて知恵を授けてくれるのです。雌鳥は「卵あげようか」そうすると「おうちにあるからいらない」「じゃあまた探しに行こう」と言うとガチョウに会う。「枕ができるように羽根あげようか」「それもいらない。おうちにある」「じゃあ、また探しに行こう」今度、山羊に会うのです。「チーズがとれるようにミルクあげようか」「それもおうちにあるからいらない」そして森に出かけていく。みんなは断って行かないと言うと、ダニーは1人で森の奥にいるクマさんに「いったい、何を贈ったらいいだろう？」と訪ねに行くのです。読み手の子どもたちはいったい何が起きるのだろうと真剣に考えています。答えがないままにおうちに帰ってきて、お母さんと問答します。「お母さん、誕生日の贈り物」とお母さんに言うと、お母さんが「卵かしら？ミルクかしら？チーズかしら？」とダニーが出会ったことを1つ1つ聞いてくれる。すると全部違う。「こうだよ」と言ってダニーはお母さんをギュッと抱っこする。これがクマ抱っこ、ベアーハグとって、原題「アスクミスターベア」、クマさんに聞いてごらんという話です。読んだ後になんともいえない気持ちになります。ところが、中に1人「何にももらわなかったね」と言う子がいて、

私は「現代っ子だな」と思いました。確かにものは何にもないです。それを全否定するつもりはありません。子どもたちは本の中で味わう感情や、人、できごとを頭の中に貯めこむ時、今までの暮らしの物差しで理解します。人とどう関わっているかとか、喜びはこういうこととか、お母さんやお父さんにこういう言葉をかけてもらおうとか、友達とこんなこととして楽しかったことを全部物語の中に跳ね返していく、投入していくのだと思います。そういう意味で本を読みながら心を揺さぶられることはとても大事です。これからますますいろいろな人と出会ってほしい、いろいろな考え方をする人と子どもたちが出会ってほしい、そしていざ自分が体験しようとする時、人と面と向かおうとするときに、どうすればいいのかを考えながら、思い描きながら、人と対する力をつけていてもらいたいと思います。子どもは、現実生きる力、強く、たくましく、やさしく生きる力を本の中から知らず知らずのうちに随分もらっていると思います。

『ロバのシルベスターとまほうのこいし』には本当に切なくなってしまうと、年長組のある子どもは泣きながら聞いていました。自然に涙が出てきてしまって、その泣いている姿を見ても他の子が冷やかさなかった。私はその姿に感動してしまいました。後で皆さん読んでみてください。ロバの一家の話ですが、子どもたちは人間のこととして聞いていたと思います。この夫婦の間にシルベスターという子どもがいて、そのシルベスターが赤い魔法の小石を拾ったことによって大事件が起こってしまって、シルベスターは石になってしまいます。願い事を叶える石なので、ライオンに出会った時に危害を加えられないように石になってしまったのです。そうしたら、お父さんとお母さんに見つけてもらえなくなってしまった話です。最後には元の姿に戻るのですけれども、両親が1年経って、この子に会えなくなる時、1人の子どもがかわいそうだと行って泣いたのです。最後再会した時、その子が本当に晴れ晴れとした顔になりました。

その子どもが今21歳になりました。すてきな子になっていました。現在、大学4年生です。昨年6月にその子から突然電話がかかってきたのです。もう10何年も会っていませんでした。「どうしたの?」と言ったら、「私、就職先決めたから」というのを聞いて、「え?」と言ったら、「子どもの本を作る仕事に決めた」と言うのです。「どうして?」と言ったら、「小さい時に、いろいろな人にいろいろなものを読んでもらったのがとても楽しかったから、今度は作る人になりたい」と言いました。言葉は生きている。物語はその子の心の中に生きているように思います。

子どもが生まれた時、就職の時、進学の時等、人生の岐路にさしかかった時に、自分がたくさんの人に愛されていた幼い頃の記憶をふと思い出すことは、とても大事だと思います。幼稚園の先生になりたいと相談しにきた子もいます。「小さい頃に自分がいろいろな本を読んでもらったので、今度は読んであげる人になりたい。」と言っていました。ことあるごとにいろいろなものを読んでもらった子どもたちは、生活や遊びや仲間が膨らみ、思い描く力を自然に身につけていくのだと思います。

本の中には遊びの本もあると思います。物語の本を読む時、私たちはつい、きちんと最

後まで聞かせたいと思います。でも本にはいろいろあるのですから、ときには徹底して遊んでもいいと思います。そういう本を読むと、子どもたちが自然に肩肘張らずに本に近づいてきます。もしも本嫌いの子がいたとしたら、こうした抵抗のない本から読み始めたらいいと思います。そんな意味で、言葉遊びの本とか、遊びの本は多いに役に立ちます。

これは『なかまはずれ』という本で、一応数学の本と言われているのですが、子どもにとっては遊びの本です。5歳くらいの子供たちが読むとものすごくおもしろいです。3巻がセットになって出版されています。これを年長組の子と毎年読んでいました。子どもの着想が実にユニークです。私たちは1人1人の子どもの生き方が違うことをまるごと認めてあげることがいかに大事か気づかされます。みんな違っていいよということを認めることから、子どもは友達をわかっていく、認めていくようになると思います。それと同じで答えを求めない、強要しない本、けれども考えることを楽しめる本です。1番最初は簡単なところから入ります。分類ですね。青い四角がいっぱいあって、丸が1つしかない。これを仲間はずれと言います。形と色が違います。それから、このてんとう虫が仲間はずれでしょうか。最初は答えが書いてあるのです。ここにキツネとアヒルがいて、まぎらわしいですけどこれは違います。だまされてはいけません。これが仲間はずれ。これは動物と植物の違いです。ヒントはここまでしかないです。そしてここから先は自分で考えてください。どれが仲間はずれかよく考えて、どうしてそう思ったのか自分で言ってください。こういう内容なので、話を通して聞く気がなくても遊べると思います

中村先生「どれが仲間はずれかな？ どうしてそう思った？」

子ども「ハシゴがあるから」

中村先生「君はどう思う？」

子ども「これ、ハシゴがついているから」

中村先生「2人共同じ答えでした。そういう時同じだねって言ってあげればいいです。」

「お母さんは？ どれが仲間はずれだと思いますか？」

子どもの母親「自転車。車が2つだから」

中村先生「車の数できました。じゃあもう2つくらい。これ？ どうして？」

子ども「オープンカー。屋根がないから」

屋根がないからという意見がでました。そうすると、たいてい自転車だって屋根ないって言う子もいます。「本当だね」とうなずいてやればいいんです。

その家庭に小学生がいたら、難しいこと言うかもしれないし、突飛なことを思いつくお父さんがいたら、「へえー」と驚きあっていたらいいと思います。実は答えはありますが、何ヶ月も楽しんでいるうちに自然に答えが引き出されるかもしれません。子どもが本にむかう時は今持っている言葉や知恵で勝負するのです。だから今のわかり方を認めることが1番大事です。「へえー」と驚いて、「じゃあ、おかあさんは？」と聞かれたら、お母さんなり

に「これだと思うよ」と答えればいいと思います。

ある時、こんな答えをする子どもがいました。「自転車」と言うのです。ああ、この子わかっているのかなと思ったら、その子は「免許証いらないのこれだけ」と言いました。すごいなと思いました。たいてい自転車と言うと、漕がないと倒れる、それから自転車だけ窓がない、濡れる等外観のことだけを言うのですが免許証という発想はおもしろいと思います。言葉を交わしあうことが大事です。これは赤ちゃんの時に食べ物の本を見て、「あっ、あっ」と言って、おいしそうだねというレベルと同じだと思います。年齢が高くなっていてもいかに言葉を楽しむことができるかだと思います。(果物のページを開いて)このページもおもしろいです。小学生は解答がわかります。どれが仲間はずれでしょうか？子どもはいろいろなこと言います。さくらんぼだけ実が2つ、これは皮むかないで食べられると言う子がいました。それからレモン。これだけまずいとか、すっぱいとか言います。本当にその時々を知恵が凝縮していると思います。ある時、年長組の父母の会で『なかまはずれ』をしました。あるお母さんが「贈答品とそうじゃないもの」と言いました。高価なものとか普及品とで分けていたので、これは大人の知恵だなと思いました。言葉遊びをしたり、言葉を交わしあったりすることは、関係を作ることだと思います。

本を読んであげていて、おもしろいと思う時は、大人になった卒園児に出会う時です。最初に受け持った人は、40歳を越えています。その人たちが子どもを連れてまた来てくれます。たいていそっくりです。子どもを見るとよくわかります。誰ちゃんのお父さんかなと思います。卒園児たちが言うには、年長組の記憶は鮮明に残っているそうです。年長の時に読んでもらって心に残った本は、ずっと捨てないでとっておいた。そして子どもが生まれた時に読んでやろうと思っていた。あとは実家に全部取ってあったのもらってきた。そんなふうに言ってくれます。読んでやっているうちにありありとその時代を思い出して、一緒にその本を楽しめるのがすごく楽しいと言いました。

去年32年ぶりに再会した、Sちゃんという子は36歳になっていました。「私、誰だかわかる？」と言われたのですが、「Sちゃんでしょう。あの時のままの顔をしているから」と言いました。彼女は2年生の子どもがいるそうです。「小さい時読んでもらった本で何が1番記憶に残っている？」と言ったら、『スーホの白い馬』です。年長の時に読んでもらいました。すごくよく覚えています。白い馬に矢がささった時、先生が鼻をくしゅくしゅしながら読んだの覚えています。あの時泣いていたのでしょうか？」と言われてはっとなりました。約束を破った王様に憤りを感じて、きっと私はくしゅくしゅしながら読んだのだと思います。その場面をリアルに思い描ける。物語と結びついて、人と結びついて、その部屋とも結びついて、その子の中に言葉が生きていたのだと思います。絵本を読む時は肉声に限ると思います。本当に肉声の思い出は子どもたちに強く残ります。うまい読み方とか下手な読み方なんてないと思います。肉声で読んでやることで、子どもは大きなものを得られる。だから上手に読もうなんて気はなくてかまわないので、そのままさりげなく自然に読んでやったらいいと思います。

次に『ちいさいおうち』を紹介します。テーマは時の流れかもしれませんが、交通史とも呼べるようなおはなしです。ディズニーが映画化しました。のどかな田園に小さな一軒のおうちが建っていて、そのおうちの周りが増え、車が通るようになって、地下鉄まで通って、小さいおうちはだんだん古びてしまって、住む人もなくなって、そしてあたりの変化をいやだなと思います。そこへこの家に住んでいた人の孫の孫の孫が通りかかって、また小さいおうちを元とそっくりな場所に移動してあげたおはなしです。

年長組に読んであげました。そうしたら、これが大好きになった男の子がいたのです。非常にかわいさしている子なのです。いつもやかましいし跳ね回っているのですが毎週借りていくのです。その頃は土曜日に貸し出ししていたのですが、貸出日が近づくとこれがなくなるのです。不思議に思って、なんとなく隅っこから見ていると、その子が隠れているのです。金曜日になると、床や、戸棚等に隠すのです。そして、1冊しかないからだと思ってもう1冊買いました。その子に「どうしてそんなに好きなの」と聞きました。すると「静かだから」と言ったのです。いつもにぎやかなその子の答えに、すごく私は笑ってしまいました。その子の本を見る細やかさはやっぱり何十回と本を見た子の読者の目だと思います。その子は自動車の量が増えていくと、スモッグがかかるページがあることに気づいていたのです。あるところから空が青空でなくなるのです。きちんと「お空が黒くなってきたよ先生」と言うのです。私とその子で一緒に見つけたのは、女の人のスカート丈が短くなるページがあることです。時代と共にロングスカートが短くなって、交通の発展とともに時代で服装が変わっていきます。やっぱりそれはしつこく見てきた人にはかなわないです。信号はいつできるか、ガソリンスタンドはいつできるか、それが全部頭の中に入っているのです。これはおはなしとしてももちろん楽しいし、絵を見る楽しさもあります。おはなしのテーマは、お金で買えない価値があるということだと思います。先ほどの『おかあさん、だいすき』もそうで、ものや、お祝いするかたちや、売り買いできないものがあることを、幼児のうちから体験できることはとても大事です。そういうことを日常的に説教で教えるのではなくて、子どもがおはなしの中で自然に出会えたら素敵だなと思います。

<昔話の再話化>

今、絵本を選ぶことは楽しいけども、難しくなっている世の中だと思います。いろいろなジャンルが広がってきて本の作り方にも、冒険やいろいろな試みがあって、本の種類は増えました。それだけ購入する側から考えると絵本を選ぶのが難しくなっていると思います。あと、昔話の再話化の問題が大きな問題になっていると思います。子どもたちを律するようなことも時には大事なわけです。少しずつ世の中が崩れかかっている時に、本も崩れていくと思えてならないです。

例えばこんなことがありました。ある保育現場での話です。私が研究会に出た時に鳥かごを持っている人がいました。ベテランの保育者です。そこにチャボが1羽いました。「ど

うしてこれを持ってきたの？」と聞いたら、「実は、保育園で飼っていたチャボが死んでしまったので、今日ペットショップに行ってそっくりなのを買ってきた。明日すりかえてやります」と言ったのです。深くは彼女と話せませんでした。新しく買ってきたチャボの命と保育園で子どもたちが大事に飼っていたチャボの命は、よく似ているけれど、別物です。お子さんが幼稚園や保育園や学校に行くと、たいていはクワガタやチャボやモルモットなどの生き物がいると思います。どんなにかわいがっていても生き物は死にます。死ぬ時が私たちの勝負の時だと思います。死んだものをどういうふうにして最高の教材にして活かせるかが、とても大事だと思います。だから、触らせます。冷たくなった、硬くなった、ものを言わない、鳴かない、食べないことを知った上で、ねんごろに葬ることが、命と向き合うことだと思います。死ぬことは、理由があって死ぬわけです。それから例えば約束や、裏切りや、だまされる、そんなことも全部物語の中で必然性があるって起きます。今再話化されて市販されている『かちかちやま』にはおばあさんは気絶しているだけで死なないものがある。それだけの悪さをさんざんした報いとして、タヌキも泥舟に乗って本当は沈んでしまいます。報いとして死があったのですが、それも許しを請うように生きている。昔話は残酷さだけではなくて、やはりいいことをしていた人は報われて、悪いことをしていたら消え去るといようなあたりまえの世界があったと思います。怖いことは怖い、悪いことは悪いと育ててもらった方がずっと生きる力は強くなるのにと考えています。

昔話の再話を読むのは大変です。現在、受け持っている学生に『さんびきのこぶた』の話をしました。元の作品を知っているのは、クラスで1人でした。最初のブタ、2番目のブタ、3番目のブタの中で、3番目のブタだけがレンガの家を建てたから、オオカミに殺されなかった。その話をしたら、「うそ!」と言ったのです。「最後まで煙突からオオカミが落ちてきて、煮え繰り返る湯の中に入って食べられちゃいました」と言ったら、「オオカミはごめんなさいと謝って、森へ逃げた」と最後について話します。共存したと言う人が1人いました。みんなから「それだけはない」と言われていました。元のかたちを知っていることが選ぶと言うことの根になると思います。このおはなしは合っているのかなと思ったら、元の話をつとめてみればよいと思います。グリム童話もいろいろな出版社から、いろいろなおはなしが出ています。これはこぐま社のグリムの絵本です。子どもに語りやすいように書き直しされています。その地方に伝わったように書いてある。あえて残酷なものを入れるとかそういうことではなくて、子どもに聞かせるような話で崩さない方がいいと思うものはそのように描いてある。もし選ぼうと思った時に、この『かちかち山』合っているのかな、自分が小さい時読んだのと違うなという時は、元にあたってみるのが1つの大事なことだと思います。選ぶのは、質の問題からの選び方があると思います。それから、発達や年齢に合わせた選び方があると思います。例えば、文字のほとんどない赤ちゃんの絵本を4、5歳児が読んだりすると、たいていお母さんは「もうそんなのいいの」って否定なさいます。でも、ひらがなをたどり読みできるようになると、1人で読める本を読みたがるのです。だから、あの子は1人で読んでいるのだなと思えばいいんです。無理をさせな

い。

下に赤ちゃんが生まれて、上の子が4つになっても5つになっても、ちょっとイライラする。そんな時は、大きくなっていますがそばに行って抱っこしてあげて、兄弟の話、赤ちゃんが生まれた話などを読んでやります。子どもたちの心の満足感から言えば、知りたいと思う話っていうのはたくさんあると思います。不思議だと思う世界が科学絵本になるかもしれないし、なんていう人がいるのだろうというのが物語絵本になるかもしれないし、物を作りたいなあと思えば、実用書になるかもしれない。その子どもが今抱えている問題や知りがっていることがあったとしたら、司書の方とかブックリストとかを使ったりして、その裾野を広げてあげると、子どもたちは大きくはばたくと思います。

<想像力>

最後に今、子どもたちに大事にしたいことと想像力についてお話したいと思います。子どもたちは体験することが何よりも大事です。川の水、山登りの苦しさなど何でもいいと思います。おにぎりを作ってみるとか、子どもたちに体験できることは、体験させてやりたいと思います。そしてその体験の中から生まれた言葉や、物語の中で出会ったすてきな言葉をその子の糧にしてあげたいなあと思います。想像力を持つことが、どれだけその後の人生に豊かさをもたらしてくれるかなあと思います。想像力は、現実に存在しなくても思い描ける力だと思います。遠方の人や、知らない人、見たことのないできごととか、そんなことを自分のことのようにして内側に取り込める力が想像力です。それが人を理解する時にもとても役立ちます。

ここに『エルマーのぼうけん』シリーズがあります。3冊セットで出ています。これは絵本を読んでいる子どもたちが、幼年童話にさしかかる頃にちょうどいいくらいのレベルの本です。年長組を受け持つ時にいつも読んでいました。子どもと竜のおはなしです。1ヶ月かかって3巻を読み終わって、子どもたちとキャンプに行くことになりました。そのキャンプ先で何かおもしろいことないかなと思って、「竜っているのかな」と言ってみたら、子どもたちみんなが「いる」と言うのです。「どうしよう」と言ったら「手紙書こう」と言うのです。子どもたちがどこにいるかとか、何を食べているかとか、家族のこととか全部代筆して、「どうしよう」と言ったら、「保育園で一番高い木に結わいといて」と言うのです。結んでおいたら、何日かして返事がきました。「この上を飛んでいる時に、何かがあったから見たらお手紙だった。ありがとう」それは誰かからの手紙かもしれませんが。そのやりとりが半年続きました。何かあるたびに、子どもは来てもらいたいから「こんなことをしたよ」、「運動会あるよ」と手紙に書いていました。とうとう冬になって、お別れしてしまいます。「もう寒いから南の国に帰ります」という返事が来てしまいました。夕焼けの空に雲の間から光がさしていました。子どもは悲しがつて悲しがつて、「さようならー」と言っていました。私は後ろを向いて「ごめんなさい」と思っていました。

おはなしの中の人物を、自分の仲間にして存在させ、言葉を交わし合っている。3年生に

なっても信じている子がいました。年長で信じなくなった子もいました。それは構いませ
ん。子どもは、赤ちゃんの時から、「あっ、あっ」と言って楽しんでいたことが、点が線に
なっていくか奥行きができて、言葉で人物を楽しめて、絵を見るだけではなくて、読んで
イメージが描けるようになるまでに、たった 6 年くらいしかかからない。それだけ人間と
して豊かになったのだと思います。言葉を膨らませていった子どもたちはきっと聞くこと
が好きになると思います。言葉をたくさん聞いてもらっている子どもたちは、相手に言葉
をかけることが大好きな子になるのではないかなと思います。読むことは無償の行為です
から、何かのためにじゃなく、楽しんで読む、それも大人が楽しんで読む、子どもと遊び
ながら読む。あんまり自分を窮屈に責めない。こう読まなくてはいけない。上手に読もう
と思わない。飽きたら止めてしまう。それぐらいでかまわないので読んでいくうちに、子
どもがいろいろなものを自分のものにできたらすてきだなと思います。やがて、その子は
親になったとき同じことを繰り返します。本にはそれだけの力があるように思います。皆
さん目の前にいるお子さんに楽しんで読んであげていただけたらいいなと思います。